寛永諸家譜 清和源氏戊二冊之内 頼親流

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (32)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

高木

寛永諸家系譜傳

清和源氏　戊一

頼親流

高木

大和守頼親七世の孫判官代源信光はじめて高木と号す其子孫又かまて或は尾刑小路或は二刑小路と先祖家傳の系譜并小源高氏郷より先祖小[illegible]所

浅草文庫

の右刀 赤行 皆を代言木の越候八郎
さいしのこまをお渡も
文禄乃比てしおうひて三刀碧海の
郡竹村小領を愛長のけ使
死て拉なりこまふうて系圖
伝失も

宣光

六郎左衛門 三刀碧海郡牧内村ノ領主

永禄九年二月二百死八十二歳 法名性玄

清秀

善次郎 白水助
母ハ酒井平兵衛正信女
大永六年三刀牧内村ニて生
ル年ハ水野下野守信元小姓ニて
尾刀智多郡緒川小領主
天文十年三刀刈谷城合戦乃時今村

伊賀守信繩と同じくまんで弛をあ
てゝ付小清秀十六歳を以て下臈
守り詳をさわて織田彈正忠信秀小屋
を同十七年三月小豆坂にて彈正忠と今
川義元が軍勢と合戦のとき清秀勇
上ゆく弛をいのゝせたわふをあひ首を
とりて獻ず又先陣小すまんとすを
彈正忠志わくこまをとゝめて旗下に
いのゝむ先時の慶賞としてもつか

碁石をさづけ代ときに同慶賞をうけ
ものゝ清秀と山口平兵衛政二人なり
其後三月安祥のうち小をひく加増
の宗地をゝまふ三河尾刑部賢のう
ち小おわく立て加増をゝまゝる
下野守たびゝこまをまもくゆ又
緒川小還住を
同二十二年畏濤乃御勢尾刑村木の元
出ゝる緒川の軍勢こまをせて

時清秀先りけるして城戸口ふせぎみ
人をうしろ敵このとき城戸をさす
也清秀城戸をのくとき所ふ城門
ふ殿をいてこまをつゞこの間清秀
疲をうしろ
永禄三年三月尾ふをのて墨濃江
御勝と合戦の小瀬清秀先かけ
して殿をいのを敵をうつ
同四年墨濃乃御勝尾州緒川ふ出張

まろのうしはけきろ也清秀敵軍
をうくあ只一騎乃りあてを也
むふこまふうわて緒川勝ぐいて
石り漸ふまみ合戦のとき清秀川
伯耆守と一番乃殿をあを又本
多肥後地村庄右衛門と殿をあを也
其後水野藤次郎をきろ清秀こ
まをうく汝さまとふまむ
屋しさいてするうら六人まむふ

諸士を又はげしくせめしときき清秀
我をもつて敵とはせず安藤帯刀を首と
なしけれ日数度はせ合戦して清秀強
とおもうゆえ七度なわこまをわさと
石瀬小おぬく度く合戦のさき清秀
敵にあらずして功をなさまいる
なり

同六年三月一向宗一揆をおこせ羽柴
秀吉の手の者
秀吉水野下野守思川の御城小屋
をきき清秀力戦して疲をうけ
東照大権現小渇しそまりゆ
同七年清秀下野守小屋をとゝ
先祖の名田三郎大郎乃領内あり
のよし

大権現こまをきこしめしてすかりの御
判形をもつて西りそにこまを不持
元亀元年江州姉川合戦のさき
軍功なり

天正二年乃秋織田信長勢列長島の
一揆を せむるとて 嫡子光秀とも
に 我切りの 時小光秀光小まこで
底をうつ乃清秀敵を きりそけ光
秀をうまけて味方乃軍にいるる
乃ちゝ日國濱乃地荒小おわて一揆と
合戦さて一揆の勢つゝして味方之
ゝ利をうしなひ緒川弟及ん軍勢も
敗走せんとする時清秀只一騎たゝちふ
ゆ徒乃中小おり入を信長高所より見
を見あひてゝいまゝ乃織を見て
見てすむものいさゝめくこれ言未
ゝのなゝとのゝまりゝ清秀
まんてゝせむゝ結士こを見て
はゝひそき河乃一揆はわて
敗小をこ乃時賊徒乃ゝら感林坊と
逃をのゝせてゝ首をゝ信長大小
感悦したまゝ

同三年三月七條合戦のとき軍功を
をげまして敵をうちとり数ケ所の疵
をうる
同四年大坂門徒河内十七ケ所にたて
てこもり信長こまをせむ是もまさき
水野小猪守死をふかうち緒川城の
諸士信長の命ふかち依久右衛門尉
信盛に属し清秀も又こゝにあり
あり依久は先清秀をたうして陣場を
ゝめゝ場こゝの地にいる依久ゝ
先ゝこゝの所に陣をゝるものを見て
依久はゝこゝす清秀がいくさ
ゝば敵かゝるゝ是をおさえゝば
かゝの陣ハ屋ゝるべしと同のゝるゝ及て
敵ゝゝてかゝの陣をおびやかす也
加勢を依久はふふ清秀がいくさの
陣屋ゝれゝ敵ゝるゝ陣ゝゝ
屋味方の陣をとゝまりて加勢

をたりて事なれさいひれいそ
てかの陣屋ずの本をとものぶ歌を
まちわきうひいきるといでて味方海
をかくまもふかわあ一て屋ぶる本
ひるさずりて賊兵ををひくしを
同五年松永弾正久秀和列信長
の城ていくこうるに織田信忠を
をせむ時清秀二の丸門際ふをあて
一番ていを首級をはる

同六年信長荒木摂津守村重がそ
こもる立花の城をせめたる時清秀
并弟清方次男一吉等一番ていを
てこの時城中の兵ひくして味方死
一底ひくものを見ふる信長
兵をかさめくか所

同十年

大權現高木九助正廣を御ひとして
御鷹下て屠まべきの首飼令ひるに

うの甲州新府御対陣のさき
大權現を初めまゐらせまゐらせ領地
ゑ石をゝ面ゝ
同十二年尾州小牧御陣の時清秀と
内藤四郎左衛門正成両人御同行となり
て諸軍を下知せし時清秀御馬を敵
領を
同九日長久手合戦の時敵陣へ抜入ふ
むかしをとゝくゝ敵おうひきゝ清
秀馬上あて遣をいつをせきおとし
て郎等小兵首をとゝめ御感不
一御合戦の勝利を賜まゝへきの
旨頂戴を
大權現御感あつて合戦勝利を賜ま
のゝ旨とも御實検のときみまやふ
小幡の城へ入給ふ屋きのゝを言上
しけもば
大權現こもをゝみたまふ

同十八年桐列小田原御陣ニ供奉
大權現関東を領し給ふ時桐列武列
と総のうちにおゐて立石の采地をた
まはる諸役をゆるさる
文禄元年朝鮮陣のとき清秀老年
ニおよび因免をうけさせ給
大權現御渡海の家臣をきうさめ
肥列なこやかゝりたまふ
大權現を志をかんしたまふ命かゝりて

秀吉（まみゆ秀吉あるかゝめその名を
きゝめして羽織をゝ領ス
同三年家督を子匠次小四郎ニ桐列
東那海老名村乃領地ニ遷居ス
後慶長年中
大權現御書野のほとりに清秀屋敷
渡御ありて面会まで御書乃居并
ニ御服を拝領
同五年會津御陣ニ沢御陣供奉

御さうしといへども御跡をしたひて小山
にいたり
大権現を拝したてまつりしかば是を
感したまふてよりて宇都宮にいたり
台徳院殿にまみゆ其志を御感悦あり
て錦の御羽織をたまふ法体に依て
へきのよしのぞみを申といへども志あつく国に
かへる事をゆるし　厳命にいたりて是
より国にかへる右の手を下りとゞめて

数度の武功ありといへども掲示并なり
年月分明ならざる故にこれを略す
同十五年七月十三日相州におゐて死
年八十五　法名性頓

清方

甚太郎　母はふたおなし
天文三年三州牧内村にして生るか年
の時より兄清秀と同じく　水

野下総守信元一属ス
永禄四年思濃乃御堺尾別緒川小
牛原のとき横根村小おわく相戦
仍後助をうらう朋三日ハ石瀬合戦
乃とき家瀬新右衛門をうちとる
二乃首を後日一族のものし
うゆくこをもつて
同五年三河荒川乃うら分ておて
清方一人跡ふらう入敵をうちて
首を討ち
天正六年 橋乃豊乃跡をせむる時
依久弓ゝ小つゝく跡乃扉を
乃ゝとき底をうつ水野
和泉守忠重一属ス
同十九年
大權現御旗下一属ス きのむ
孫高木九助正廣鉤命をけ
ゆくこをもつて代乃数

度乃軍功のうといへども場不并
歌人小路なるゆへこれを略す
慶長四年十二月十四日相列ゆく死
年六十六 法名淨林

女子

今林伊賀守信繩が妻

女子

太田彦左衛門正勝が妻

女子

服部二右衛門正次が妻

女子

小林次郎右衛門信隆が妻

清政

太田長左衛門　母は大橋助兵衛が女

永禄元年尾州緒川にて生る後年

太田西九郎四近

大權現に仕へ三河に籠城して

うち死を跡をつゝしみなきゆへ

大權現の命にて天正三年太田の氏

を仕へくまる

清本

長右衛門

母は小おなど

元久に小田原関ケ原御陣に供奉して

元和五年六月四日武州にて死を六

十二歳　法名浄徳

子孫こもとの太田の系図にて

しる

永禄三年尾列緒川小笠
天正十九年父清方とともに
大権現小法師丸てまつり関ケ原大坂
あ度乃御陣ニ
右徳院殿の供奉
寛永八年正月廿七日武列ニて死
七十二歳　法名順教

元右

弥五左衛門　義右衛門
天正十七年尾列緒川小笠
元和元年大坂御陣乃とき言木
ニ水正正次小屋ニて五月七日天王寺
口ニて合戦をはたらき少沢
元右衛門　敵陣小乃うちて城
乃さくきハいいきるこゝ水織部
信義大久保源三郎　志紀円平助
長重ハ　たゞハてゝとゝ

寛永九年閏十月十日 橋列大坂ニ死
四十四歳　法名善教

信次

茂右衛門
寛永二年武列江戸ニ生る
同九年元右ヶ丘跡を相領ス
同十七年
将軍家へ江戸まいり

清賢

安右衛門　毋いと江戸
天正七年尾州緒川ニ生る
慶長三年
大権現へ江戸まいり
関ヶ原并ニ大坂右度乃御陣ニ
供奉ニ出ル
台徳院殿

将軍家へ法名まいる

清正

六郎左衛門

慶長十一年相列あて生る

元和三年

台徳院殿へ参る

助方

忠太郎

慶長十二年嫡列て生る

元和九年

将軍家へ法名まいる

清貞

久左衛門

慶長十五年相列小生る

清吉

母兵衛　母ハ上杉家
天正十一年尾州緒川ニ生る
慶長四年
大權現小法ニ成
関原大坂両度の御陣ニ供奉

妻

七坂弥右衛門妻

妻

荒井市左衛門妻

光秀

若次郎　母ハ水野周防守元氏女
永禄二年尾州緒川ニ生る
天正二年九月廿九日尾州七鴻ノ
おゐて一揆蜂起のとき父清秀ヲ

ごとに先陣をみて敵をうち疵をう
ふる信をこと感じてもづる業を
たまもる療治をくりかさいとをる
くして翌日法わ一死をゆきふ
十六案法名学業

一右

内脇　後小志摩守と号を
ゆハと上下用

ゆ年より父清秀さゆとふ水野下野
守信元小属を
天正六年掃列在恩城をせむるゆき
依父ゆゑ下属して父清秀と用
く扉をのり疵をうふ
同十年父清秀
大権現下法へてまゆ乱こまふゆ父ゆ
領地をつく水野和泉守忠重下
属を

同十二年尾刑も公方と合戦のとき多勝
忠重がしたいて敵をうちそ首を切
うり
同十八年小田原御陣のとき忠重
くみあて敵向も
文禄三年
大権現乃命ゆうり薄府守忠吉を
てつうふ
慶長五年関原御陣乃時忠吉ゆ
きうひて敵向し一吉先陣ゆきみ
をとく味方つ
一吉をもひて援さも
其後尾刑義也卿ゆ大坂れ
陣乃時尾刑して城乃留守番をた
ゆし寛永元年九月十四尾刑して
死も年六十四 法名性愛

右任

俊理　母ハ依治倫中守為縄女

天正十二年尾列緒小ニ生ル

尾列義忠卿ニ仕フル

右忠

内膳　母ハ石川豊江守信光女

慶長十年尾列小生ル

右重

元平　母ハ上小田

慶長十四年尾列小生ル

右平

久大夫　母ハ上田

元和四年尾列小生ル

右頼

次三郎　母ハ上小田

元和五年尾州小牧

右継

白馬助　母ハ上小野

寛永六年尾州小牧

為信

忠右衛門　母ハ上小野

天正十七年尾州緒川小牧

元和元年

右徳院殿ヶ原ニ於て生まれ

同年大坂御陣乃ち沢言木白水

正次ゑみすて伊奈

寛永元年大番乃組以上

為次

玄太郎

寛永九年武州江戸に生る

同十八年

將軍家を初め奉る

右孝

蜀書助　母ハ上杉用

右次

天正十九年駿州に生る

弥太郎　母ハ上杉

文禄二年相州に生る

慶長十四年

右徳院殿に仕へ奉る

同十九年大坂陣の時大和山城

定義組ゆへ供奉

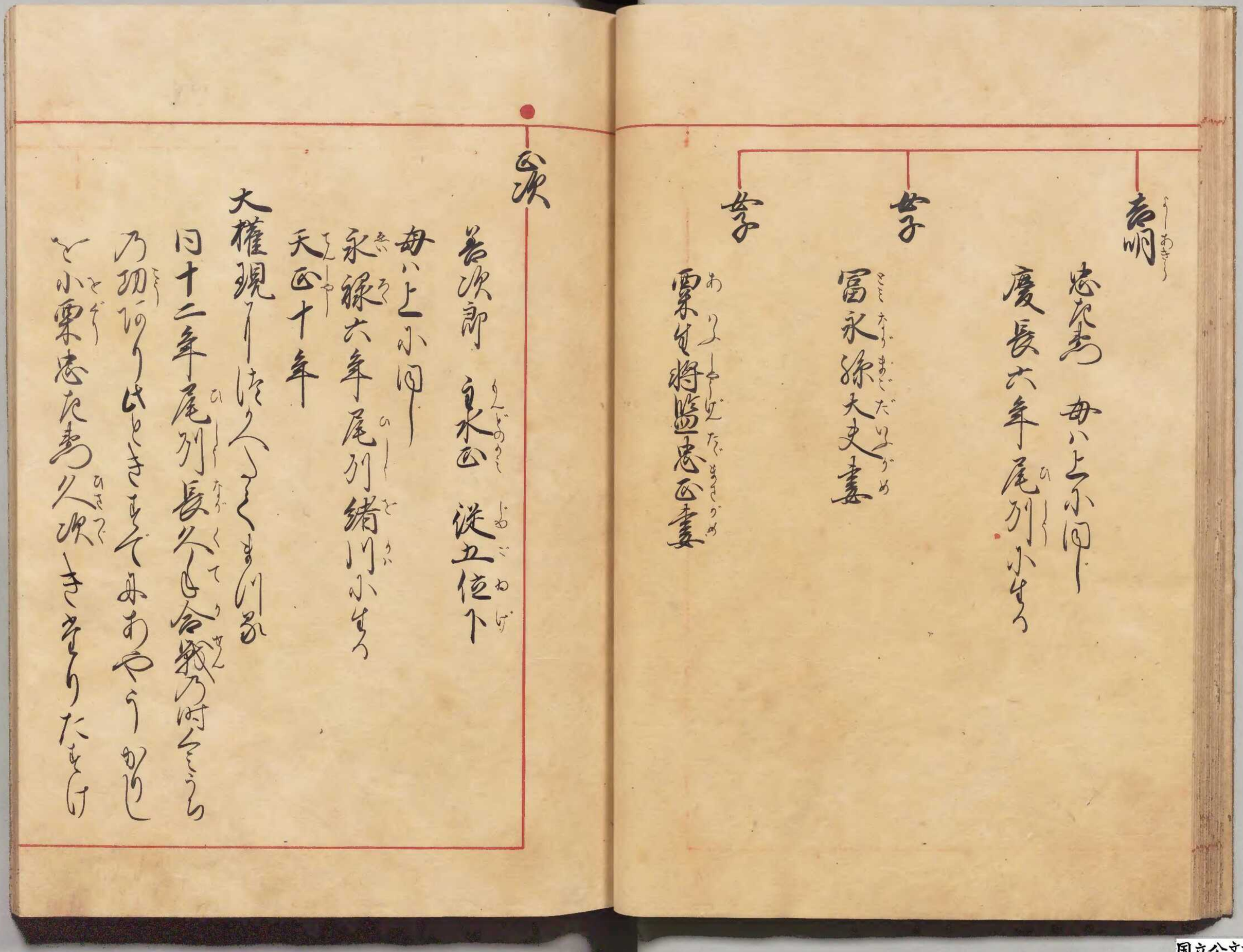
元和元年大坂再乱のとき伏山城守
組あて江戸御番丸番守番をつとむ
同二年
右徳院殿の命ふるわ後河忠長卿ハ
はりつけ
寛永十一年
将軍家へめしあさる

右長

右源太
寛永八年武州江戸にて生る
同十七年
将軍家へはりつけ

宣行

与二右衛門 母ハ上ハ同
慶長元年相州小田



- 有明
  - 忠次郎　母ハ上小田原
  - 慶長六年尾州小牧
- 女子
  - 冨永孫大夫妻
- 女子
  - 栗田将監忠正妻

忠次

若次郎　永正　従五位下

母ハ上小田原

永禄六年尾州緒川小牧

天正十年

大權現ヲ助ケ奉リ

同十二年尾州長久手合戦ノ時ニ

乃功ヲ以テ

ヲ小栗忠次ト久次ト

ヲ

ていのちをまもりたる

同十八年相列小田原御陣ニ供奉

大權現関東を領したまふときに武列小

おゐて千石乃采地をくさう其乃ち

奥列陣肥列名護屋茗乃御陣小

御旗本ニ供奉

文禄二年父清秀はりゝとやめ小ち

亟沢家督をつぐ五千石を相領をゆ

おゐ乃千石ハ弟守次ニたまふ

慶長五年美田陣乃ときに

右徳院殿乃供奉

同七年下総ニおゐて二千石乃御加増

を相領

同十年四月廿六日従五位下ニ叙

同十二年大番ニ列

同十九年大坂御陣乃ときに組中のの

さおなしく江戸御九乃留守番を

はたす

元和元年大坂再乱の時五月七日御旗
を先かゝ[illegible]列して組中の兵を下知
して武功をとげ
同二年に列おわく二千石の御加
増を賜ル
同九年
将軍家はじめて御上洛のとき大番頭の
中より正次と松平出雲守勝隆と為
人

右徳院殿の命ゝ[illegible]其組中をひわく
将軍家に使ひ還御のとき正次河内
丹南郡におわく千石の御加増を賜
領し大坂城代の領地として拾合一万石
をゝまゝ
寛永七年十一月晦日病死
六十八歳　法名浄照

守次

若三郎　母ハ上小間

天正二年尾列緒川小笠

同十七年

大権現小法ゝ人そまつる小田原なゝびふ

奥列関ヶ原ハ御陣ヲ供奉ス

慶長十四年十二月十二日後列ゝて死

二十六歳　法名元伯

茂久

後小守久と申ス　若七郎

母ハ花井勘三郎盛次ノ女

慶長四年相列小うまつり

同十五年

大権現小法ゝそまつり大坂夏度の

御陣ヲ供奉ス

寛永十年大番ノ組頭ニなる

女子

守勝

善次郎

寛永十七年武州江戸小石川

女子

上田清兵衛近次妻

女子

那須忠兵衛正豊妻

女子

山田十太夫重利妻

正成

善次郎　泉正

母ハ大久保次右衛門忠佐女

天正十五年壽ヲ分ル

慶長二年

大權現

台徳院殿へ献上

同五年真田御陣

台徳院殿ヲ以て供奉

同十九年大坂御陣のとき供奉

同年上総の国にて領地五百石

元和元年大坂再乱のとき高山伯耆守

忠俊ゑみて敵向ヒ十月七日天王寺ニ

おいて合戦のとき敵の先陣小

みを切ヒ敵を切ヒ敵を切ヒ

ヒうちとりたる首数

治助小林庄兵衛討死木村次郎兵衛

小田喜助数ヶ所の

疵をうけて敵の首を

台徳院殿へ切ヒ

國ニ　をくく　千石の加増をくわへられ
寛永二年十月三日　従五位下に叙し
肥前守に任ず　後に水戸と称す
同七年父頼房　次死して家督を
継ぎ頼房旧領二十万石をゝ弘ぬ天に
移る　同八年小田原の城代となる
同九年御書院番の次となる
同十年安房上総のうちにて三千石
乃至加増を賜ふ

同十一年大番頭となる
寛永十二年病に かゝり　同年十月
将軍家より松平伊豆守信綱を御使に
て安否をとゝむ　頼房謝命のかしこ
けるさまを賜ふ
同年四月二日武州江戸にて死す
九歳　法名道伯

某

竹壽丸　母世　法名相覺

正弘

若狭守　母ハ山口但馬守重政女

慶長十八年戌刻江戸小石川

元和八年

台徳院殿

将軍家を勤てそむく

正好

寛永十二年父正成死して後家督を

はぎ河内の國内一万石を領す

若年寄　母ハ上杉おすず

元和元年武刻江戸小石川

同八年

台徳院殿

将軍家を勤てそむく

寛永七年父が領地のうち一千石を相
領す
同十二年父正家卒して後又領地のう
ち千五百石下されて都合二千五百石を
領す
寛永十三年六月廿四日武列江戸にて
死す二十二歳　法名性善　正家と法
ぐみなり

正房

第十郎　母はたにあり
元和六年武列江戸小うまに
寛永十二年
将軍家を初めてまつりて房列小そ
て父が領地のうち千五百石を相領す

常

流色は正吉縁妻

女子

丹羽勘助氏定妻

女子

没樂之馬助貞辰妻

盛

若大夫　母ハ梁田紙後守康之女

清長

若右馬　母ハ上杉おなし

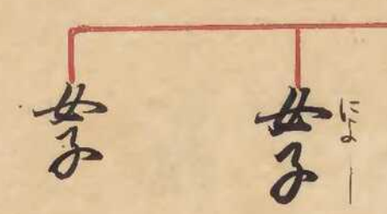
寛永十五年武列江戸ニ死ス

寛永十二年武列江戸ニ死ス

正繁

頼母助　母ハ上杉同

寛永十六年武列江戸ニ死ス



家紋打違鷹羽
（丈のうえちがいたかのえ）

高木

●豊

松築忠兵衛　俊理　甘國之列

尾刑義重郎

赤林

高木長五郎　甘國同前

母ハ言木と水助清秀の女

白徳院殿ハ法名そまたり母の姫小うて

言木と称せ[illegible]義亜卿ハ法名

可成

安兵衛　生年武列

将軍家ハ法名[illegible]

家紋丸内遠[illegible]加

●東

又五郎　長次郎　生國三列

大權現小法入くまれ子

政信

新助　長次郎　生國壹列

言木

慶長四年
右徳院殿ゟ法名ゝ被遣
元和六年六月十日病死　三十八歳

政長

表右衛門　実武州江戸
寛永二年十一月
将軍家ゟ法名ゝ被遣
同十年御加増を被領

家紋書羽

国立公文書館
National Archives of Japan

高木

大和守頼親ノ後流信光ノ庶流也
西三河高木を領するゆゑ左右を
いく称号ゝ

正直

九助　西三河高木より生る
永正六年病死　六十一歳

雲正

九助七郎左衛門　尾張国春日井郡生れ
弘治元年三河上野にて病死七十五歳

廣正

九助　後筑後と号す　三河言木生れ
母八内家氏
永禄三年尾張小河小弥助と水野下野
守と合戦の時廣正負傷し翌日大原
左を右馬矢田作十郎殿と共に大久保
七郎右衛門同次右衛門松井左近等と同
小河にて殿を切り色々軍功切り
同六年酒井将監没落の時三河上野
にて
東照大權現を初め奉りそれより法
よ仕り奉り小八郎浪人と
なり加州小河にまとどまりおはべりの

命をうけたまはり廣正代り孫太郎
孫八郎をあつけてまゐらせつかはす
む廣正が宅内を孫八郎小刀にて居
しむ
元亀三年三方原合戦御退陣のとき
廣正手負ひ鉄炮をうけて八町て
かりの馬上にしてつわり命を
全うす事を得たり
天正三年壱刀小山陣のとき廣正軍
功の家人波多野八郎右衛門を
ゆるしてつく廣正がさらきに来る
大權現廣正が功を賞してきたまふ事の
御腰物の金龍の目貫をそゝぎつる
廣正ありたまふ今小こまを不持ゆ又殘
五貫文を與八郎小さうこまをら
大權現與八郎を右衛門とよびたまふ
右衛門八郎と号す
日九年壱の卒二十人をあはせたまふ

同十二年長久と合戦とき廣正同心二十
人をりわく首を獲て鉄炮をうつむ
同心板浦又十郎孫貝助実伊藤義永
九郎左衛助市十郎熊十郎甲川熊助等
敵を斬て首級を挙ふり殘十
貫法くとゝまりて河甲川熊助ハ流竜
志右衛と云者とうちてうせむ
此人別小三十貫を領ふる伊藤義永
を関東にて石かゝれ

石徳院殿小法かくそまつり河響領と
なり
同十三年織田信雄
大權現に謁たまふ時廣正取次ふり是
に縁て信雄尾州智多那家那竜の
内にて五百石の地を廣正に給ふ
とゝ廣正
大權現の上用に逆ーれそ領常実
きのもの作小り六年のゝ知行も

同十八年壱万石ニ付六百石ヲ
加増ヲ被領ヲ今年関東御入国ヨリ
又当年三十人ヲ加合五十人ヲ支配ヲ後藤濃尾張
乃浪人ヲ召寄ル付廣正作小ラ
て養者ヲ仕ラシム
同廿年武蔵下総乃内ニて加増ヲ
て二千石の地ヲ領ヲ
慶長四年

大権現廣正ニ命して武列悉乃城ヲ守
しむ廣正ハ多依渡守正信ヲ以て再之
言上しハ今之迄年行当かすいかく
其上瞰病のうち也（ハ）ハ恩
処ヲうしなふ事ヲふさなる鈞命
おろかなる辞ヲ申あるべきて
悉の城邑三千石の地なるべ小大勝
家人二十騎当年四心三十人とあゞ
たまふ事之恩居乃余況して悉の領

内小をもつて千六百石の地を与へ

同五年

大權現大坂より真壷を廣正小をもつて

まさつ

同十一年七月廿六日武列悉て病死

七十一歳　法名大龍秀樹

来

又五郎

正信

長尺遠守

正長

長尺遠守

正次

小尺遠守

大権現の命ぶりり松平因幡守康元
了屋敷

昌孝
小左衛門

昌綱
二左衛門

正綱
九郎　左衛門　三河吉良了生

毋々村成太郎左衛門後者りもとめ
天正十二年長久手合戦の時正綱敵を
うりて首級をとりて正綱を又見をき
すて
慶長四年
大権現の命ぶりり父廣正り二千石の地を
もらり二人を苛卒五十人をあはせ
ら
同五年上杉景勝謀叛の時

右徳院殿区綱をめして羅紗の御羽織
をとらせ区綱歳卒五十人を引ね
又組中の軍士尾張流のうち日亜大膳
水野大膳永田四郎次郎同勝左衛門
左衛門石川六次郎山口平六蔵川
長兵衛石丸孫次郎朴羽左右馬
同供を小別して宇都宮小いろそれより
まゝ右駕をさきうしそうそうの木号
誘を屠く大坂へいそう

同十年仍て上りて平家を為
同十一年父廣区死
大權現区綱に命じて悪の城を守
しめ廣区り隠居の地千六百石をな
りて摂色三千石の地小大膳が歳卒
三十人のうち廿人なゝび小廣区が領
地不の歳卒五十人をひつきたまて
ゝ御自筆の御書を頂戴
寛永九年十一月十日武列悪の城

病死六十五歳　法名性空道把　廣正寺
と号す

正応

童名又七郎　九兵衛尉　紀後守
従五位下　生國壱列　母ハ正綱小田
天正十七年　後府ニて
大權現ニ拝謁ニて　ものうらはへて
まつ系図ニ十五歳

同十八年
右徳院殿をもつて小田原御陣
の後右駕ニ参さうしてまつて
波地ニ
同年御入洛の供奉
文禄二年
大權現の命ニより下総國葛飾郡松
戸村なる小根本栗山のうちて
宋地を拝領す

同三年
白徳院殿上野國緑野郡上栗須村ゟ
加増の宋地をゟ被
寄長五年上杉京勝謀反の時
白徳院殿ゟ郡宮まで御教命の供を
をはたす
同十年雷雨人を打ける
同年京を焼ける
同十八年下総國菅餅郡本郷村ゟ
六百二十四石の宋地をゟまる
同十九年大坂御陣の時御使番ゟ
なりて御同付の役をはたす十二月晦日
平野ゟ御陣を思ふ召べき
の鈞命をとる
同天満ゟ
元和元年大坂再乱の時供を立
六月
大權現八望田ゟ御陣をゟ

白徳院殿を須那原御陣をうたなの
ゝ屋きの山林正次と久貝因幡守鈎
命をうけまゐりてと言のおもむき
を諸陣ふれ廻せしかば大和守
と答して後者和泉守高虎并伊
掃部頭忠孝ら陣所へ行忠孝
正次ふいのゝ敵を追ひ八尾久法寺ふ本張
を見御馬をかされて走り出ること
のしと言上せしかば正次がいく敵今
お張をうの杉ゝて我軍ゝ走ゝ
きゝろゆゑ敵を見ゝく御旗本に
ゆくやとて再三議論を直孝い
く御お馬を大事也とさゝろ
を匹夫の勇なり何ゝ功とゝろふ
たゝんゝやゝゆゝく言とゝ
わゝいさむゝ人正次御旗本ゝ
ゆゝ耳ゝく言ゝしゝ
ゝゝ紙

大權現へ上へ見ふれて正次罪因
て言上ありて沖
ありて
日月七日合戦の河敵兵敗走味方
の勝もみるをうふり正次
池入てこれを見れて敵兵人あり
そなは
白徳院殿の御おんて軍功の勝劣を
評議したまふ河正次が事を村瀬

左馬助言上ありて正次をうんで城
際へいる河久世三郎坂部
三十郎池田彦右衛門等河使番荒相
はぐいそをみ耳る城中火の手
ものをみるを正次河本陣へ
白徳院殿へ上ひそまり茶屋
山へいる河地陣の後六日の合戦
へ正次が河別と言上せ
称賞したまふ

右德院殿相刑言座郡市庄郷ふをもて
千石の地をたまふ人員も同しく
領地をしめす
同二年上総介忠輝と御改易のさき
伯耆ゝ川く正次越後國ゝ移しき
國中の本を沙汰も
同年御持筒御鉄炮同心五十五人を
あけ給こと也ゝりさき正次ゝ川
ゝ右此歩卒流ハ阿部摂津守ふ

仰ぜられ
同八年本多上野介正純永井右近太
夫直勝を相刑宮上ゝ法ゝて國
政をゝゝし同ゝ正純罪ゝて
徐ゝ配流の時正次なゝび小伊丹播磨
守康勝去本をゝけゝて正純
父子を沙利ふなゝつゝす
同九年上総國埴生郡栗原村長楽
寺村夷隅郡蓮谷村三ヶ所ゝて宗

地千石の御加増をまゐり給ふ三千
三百餘石を領ス
同年御入洛の供奉仕り越前宰相
忠直卿御改易して九列小配流乃
ときき西次上使として京より西度越
前へ
寛永三年十二月世日浅立位下ス叙
従後守ス任ス
同九年

右徳院殿薨御のゝち
将軍家ス法ノ人ス子まいる
同年濟士十人を河づけらる
同十九年三月西次老年ゝるふゝ
公役をゆるさる

西勝

九兵衛尉　生母武義
実ハ服部小十郎改忠ゝなり西次

こと也なりてまとを
寛永十六年十一月十六日にて
将軍家と申しそもり
子
永田庄左衛門重貞が妻
家
渥美久兵衛友重が妻
剛
九助 左左衛門 生田武義
母ハ酒井備後守忠利が女
慶長十八年武州忠于にて
大權現と申しそもり
同年武州備巣にて
右徳院殿と申しそもり
元和四年

将軍家を始奉り
寛永十年三月
将軍家の命かりて父匠綱が跡をつぎ
歩卒五十人をあづけらるべき旨
おせられて作ろう小路の地を拝領
すべきの旨仰せ付られて
左衛門とゝ
同年八月御書院番のくらいとる
同年十二月御番ゝ
おせられて申ありて
七百石の地の内加増を被賜一部合
四千石を領す
同十一年御入洛の供奉
同十六年匠則病ゆへかりし事
上聞ありて違ひて役をゆるさる
匠後
左兵衛尉

正直

右衛門尉

女子

森川庄九郎氏雪の妻

女子

牧野伊波守親成の妻

女子

永井尾張直義の妻

正武

九助　母は土井大炊頭利勝養子にして

実は土井内蔵允元政の兄なり

寛永十年

将軍家を拝したまつる

巻子

家紋書附二本打遠

高木

貞政

城之助　生國美濃駒野の城主

永歳山城守了法子

貞次

西願　生國同前信濃國

秋後山城守にて候

貞久

長尾源尉　生母同前位官同前

秋後山城守にて候て美濃國信長の

[illegible]時信長一味おされ加増あり

て今尾乃城なしびに善の村々を

給り十六案乃時より数度の働こ

を致す

貞友

天正十一年病死

後兵衛　生母同前位官同前

信長他界乃後貞久死して是跡物語

を貞友にゆずり

尾州小牧表にて[illegible]のとき秀吉

より味方にまいる俺きり一門乃中

（宮川伊心をもりてたびまき

たまゝ之も信長の時より御慈悲
をうしなひ
東照大權現（御味方ふまいり毋を尾張
府（人質ニ献ぜられ
大權現御感ニ預り御目
野清兵衛人を御
城の番清を御付ゝ
長久と御合戦の引足小秀吉かゝの
城をせめ竹鼻城を水攻ゝ弱腰の
城をせめ筒井の順慶英
濃三人衆先と津屋志津と
而て秀吉働きたまふと雖
為せめ寄せたまふして淀屋に
付城をこしらへ稲葉右京父子こめ
をうも秀吉いを江詰人数をいまらる
慶長五年関ヶ原表へ
大權現御馬を出さる屋ゝとして林原玄蕃
太閤母方勘助水腐大脳香枕村まで拙

又小牧さて右の三人の輩（きこう
しを負交案内者として渋屋の境
まで引て帰り小たの三人の輩（立
ちしかすに尾張の解屋江急て
火のもれ帰るを不審一番牧村（
ゐるとしてく
大権現より沼袋進帰り名ハ前田年
郎謀反をくわだて瀧川左を毒も
ち引いるのよしきこゆる右三人

のものいうき解屋江（長むら屋ゟ使
下さる志なくて帰りて解屋江小火のも
ゆるいゆへ今尾根右衛門屋の三ケ
所ゟ出ちきかとい（ゟ輩ハ
別儀なし
小牧表御ゑ内の後尾張内府小志
ゐてこもあるかて
大権現より内府（仰入られ名ハ高木左
衛のものいうかしつもたもの

加増はなされ候ものにて
内府より黄金百貫賜ハ三人ハ小さき
小田原陣のさき尾張内府の供
をし七方面ハ兵衛ハ兵衛ハ先へ
ゆきて仕寄の場へ塀中より兵
衛ハ兵衛ハ小出ひの三人なり矢底弾底
あまりかつ
文禄元年高麗陣のさきかゑ者ハ組

て渡海し朝鮮の都へ陣の時
大明勢朝鮮の都へ加勢して出
れ加藤者ハ兵衛但馬ハ二手
充拾人ハ大明勢の陣場へ
のりつけ手ハきりてすてと大
明勢跡を去てかゑ味方へ
くハなり内田中兵衛兵衛内藤平六
細野甲斐守添田忠兵衛樋奥清十郎貞友
ハ六人去りて足軽一人を

うらうらまで引とる事なり門山ハ高麗
のものゝ元おをうしらへそこらのところへ
都ハそろへ人数を法りつくれやめらる
時右の六人塀の地とゝり一番ハのり
つけいたまも軍功をそなへまし底を
かゝつさひたくく味方こまなき
ゆへひきとり高麗のうやこに陣をもち
うら田を刈薙をとゝまる人見ハしを度
人出ハひらうをハつきかの度人を

おもゝゝとそ人数をいくまを時
貞友よりき而へけつけ三田村平太郎ハ
足痛を引つまを度人をうら頸うゝ六十
らとゝかハ薙江高麗して病死ゆ人
貞友ハ朝のゝハ
大權現へ出さ
天田陣のゝき
台徳院殿ハ供うて中都宮まておもて
大權現ハ小山に陣をまへうまゝ文ハ

石田治部少輔謀反のきこえ聞れば
関ヶ原へ御進発のうへ真友兄弟数
濃尾張の業門者どもなり御先へ糸屋
きの命ふり本多中書忠勝井伊兵部
少輔直政ふさうそへらま清須まで罷
て教句を清須まてくたりて談合
の出きふ約諾石田ヶ人数三千ど
うかもろうしきうれた徳永法
不市橋下総横井伊織真友兄弟悪
乃業門者どもの糸屋きうおろく
かもろふ川き員友人数もくすと又
ども右郷ろゆ兄弟三人約諾乃城
ちくくくき徳田をやき波阜お
その相屋の火のくをけくすきな扱
てなりて徳永法下城をもくす実
ヶ原御合戦のきさみい約諾おもてふ
在番を関ヶ原藤屋なを本領を給屋
きの作あるにら舊里てうり川

らんさまの所にこまり先小秀吉
より徳永法下（貞友が本領のうち五郎
たまうの少貞友は志多良のうちを
拾領を
大坂御陣のうちを面度なりし平方
のおさへ小美濃元を廻して御陣をも

貞家
長七郎

貞俊
次郎兵衛

貞元
三郎兵衛

貞重
ゆう九郎

文

貞長

傳助　生国武州

実々今村傳郎四長りゑなり

元和六年

台徳院殿を初奉てまつる

寛永六年

将軍家より法かしてまつれ番をつとむ

同十六年貞友養子となり家を継

貞利

検校

信長より親表の奥に入て今尾乃

城なりしを近所の領地をまゐり

貞利も今尾の城に居住

長篠の合戦のとき氏家ト全盛

言なり

貞盛

平兵衛

貞勝

権右衛

家紋丸内雪輪

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan